

浄土 第64巻第1号(毎月1回1日発行)平成10年1月1日発行 昭和10年5月20日第3種郵便物認可

浄土

monthly
JODO

1998 January

1



法然上人讃仰会・発行

日本を楽しくする電話

0088



テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

☎ 0088-82 (無料) または 0120-0088-82 (無料) [受付時間] 9:00~23:00 (年中無休) [インターネットホームページ] <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

寺院紀行

撮影●タカオカ邦彦

寺に歴史あり

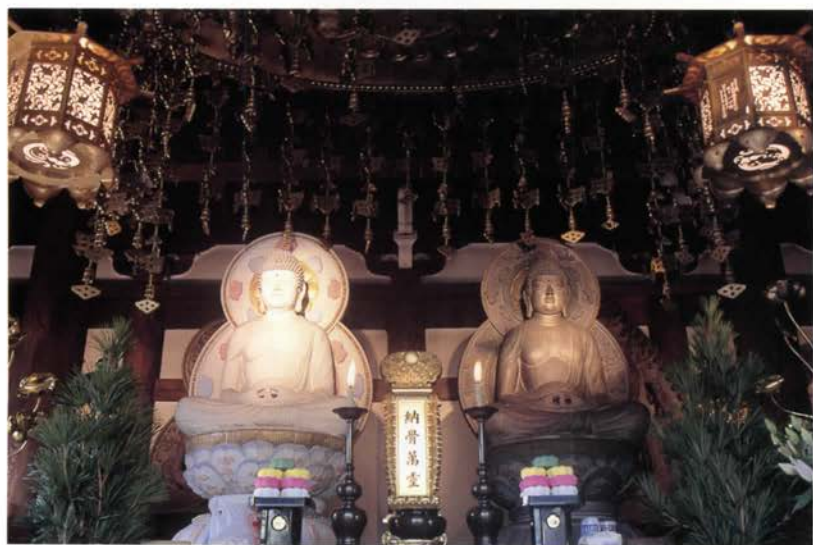
人々に信仰あり

日本の、心の故郷を紀行する

大阪天王寺

一心寺

一心寺開山である法然上人が
修した日想観を彷彿させる日想殿
の日想観絵図



納められた遺骨で造られた骨仏
(写真上)にはお参りの人が絶
えない。現在、六体ある骨仏は
骨仏堂(写真下左)に納められ
ている



山門から眺めた一心寺境内。左の伽藍が本堂



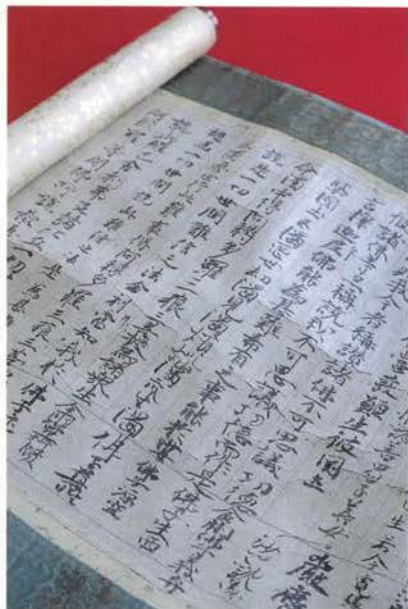
道をはさんだところにある一心寺シアター。もと花市場に劇場を作り、一心寺日曜学校をはじめ多くのイベントに活用されている



一心寺第五十九世高口恭行住職

大阪天王寺
一心寺

一心寺の寺宝である「一行一筆阿弥陀経」と「一心寺縁起絵巻」。一行一筆には佛子源空(法然上人)の自著もある



一心寺本尊

浄土

1998/1月号 目次

カラグラビア寺院紀行「一心寺」	写真＝タカオカ邦彦	3
話の話	真野龍海	8
二つの世界の子どもたち	楠原 彰	18
表紙は語る	川井 聡	25
寺院紀行 大阪天王寺「一心寺」	真山 剛	26
日本人の心を問う	本間千枝子	26
コラム 日常仏教語		41
うまい野菜と料理の話	我田 大	42
御法語に聴く		48
コラム 若和尚のちょっといい話		53
仏教相談	大室了皓	46
ホットアングル	利根川 裕	58
J俳壇		66
Jばずる		67
事務局便り		68
編集後記		70



表紙題字＝浄土門主 中村康隆 祝下
 表紙撮影＝川井 聡
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

話 の 話

法然上人鑽仰会会長

真野龍海

話は心と心のよいメディア

私の師匠は、私が長じては将来布教者になるようにと、口にはいわなかったが、私がついてみると、私はその期待に沿う歩み方をしていたようでありました。家の書棚には、布教全書、浄土宗全書、世界文学全集といった種類の本が並んでおりました。私はそれらの面白そうなのを、乱読しておりました。勿論、友達から借りた怪盗ルパンの物語、推理小説の方も夢中になって読んだようです。

そのような中には吉田絃二郎先生のものも多くありましたが、その先生が本誌『浄土』にご寄稿いただき、また、この私とその『浄土』編集のお手伝いをしたため、先生にお目にかかったり、ついには、御臨終前の酸素吸入の場に侍るようになるとは思ってもよらなかったことでもあります。

幼い頃、その寺に、両親が世話をする日曜学校があつて、私は時には、短い文を暗記させられて、みんなにお話しさせられたこともありました。母も、そこで、お話をしました。母はしゃべりながらお話を作りつつ、ぐんぐんと皆を惹きつけ、型破りの話し方で話していききました。

小山ひとつ向こうの他宗の若いお坊さんが、毎日曜、孫悟空の西遊記を連続して話に来てくださいました。来られるのが遅いか、待ちきれない時は、子供たちは門まで迎えにいき、姿を現されるや、みんな手を引っ張って本堂に案内しました。このような成り行きや環境

の中で、次第に私は「お話」の世界に関心が向いていったのであろうし、また、そのような事を実践してきた父母の自然な導きであつたのでしよう。

今度は逆に私もそのお坊さんの立場になる時が来ました。今のようにテレビなどが発達した時代でないからそうかもしれませんが、童話は歓迎されました。第二次戦争中、私のいた三重県の津の寺には、名古屋の小学校の子供たちが空襲をされて疎開していました。食事もたつぷりとはいえませんでした。特に、親の膝元を離れて寂しかった事でしよう。当時私は東京に学び、休暇には戻ると、彼らに拙いながら童話をするようになりました。彼らはお兄さんが帰ってくるといって、私の子供の時のように山門まで出て迎え、喜々としてみんな私を取り囲んで歓迎してくれました。今でもその御一人は、名古屋に行くと歓迎してくれます。

私はお盆の棚経とか、年回法要でも、たまにですが、特にお子さまを意識してお話します。棚経でお経の間じつとお子さまが後ろで、お参りしておられる場合、感心して、何か一つお話をする時があります。最初は次に述べますような『ねずみ経』というお話だったりします。もつとも時間のないときは、一口話です。それでも、御子たちは喜んで下さいます。その証拠には、次回には、その家に棚経に行くのと遠くから門口に立って待っていて、早く早くとばかり車など誘導してくれます。こちらでも感激します。

法要の時も、お経がすんで、振り返り、御子たちが焼香をし、お行儀よく列席されているのに気がつくと、心づもりしていた大人向けの法話を切り替え、御子たちを褒め、童話か子供にもわかるお話を致します。

まことに口づてのお話はいいメディアで、人と人との心を結びます。最近ではビデオ等が便利でもあります。が、こちらの心が対話のように通わない点が不便です。

極楽でも仏様はお話をされるのはなぜか

さてそのようにお話は人に心を伝える不思議なものです。が、極楽浄土でも阿弥陀様は説法をされるとお経には説いてあります。実は、私は少年時代からお経を読まされていましたが、子供ながら、このことを不思議に思っていました。みなさんは、そうお感じになりませんか。なぜ、不思議に思ったかと言いますと、私どもはお念仏によって浄土に往生できれば目的を達成した、つまり、念仏往生で極楽にゴールインしたのだから、いうなれば娑婆を卒業して迷いのない仏の国の極楽に生まれて悟りの世界に入ったのであるから、そこで、また、お勉強をするのかな、という子供の時代の疑問です。

このことに答える人はいないだろうと、ずっと長い間、心にしまっておりました。どの本にも書いていないし、また、このような疑問を持つ人もないのかもしれませんが。そう思っています。かなり長い時間が経過しました。ところが、次のことが昔から仏様のことで言われていたことですが、このことだと気がつきました。

さて、お釈迦様は悟りを開かれてから、もとの家来の五人の比丘たちに会われた時、その比丘たちが、私のことは「如来」、梵語で「タターガタ」と呼ぶように注意されました。「タターガタ」とは「タター」が「そのまま、ありのまま、真実のまま、真如、如」という

意味であります。「ガタ」とは「悟った」という意味があります。また、「ガタ」は「ガタ」（話す）と理解して「説法する」という意味があるとされます。「ガタ」は「来、去」という意味がありますが、それでは意味が通らないので、私はとりません。私は分かりやすく、意味をいつまでも覚えてもらえるように、「ガタ」は「ガタ」と理解して「語る（カタル）」ということ、というように語呂を合わせて説明をしています。事実、お経には語呂合わせで分かりやすく説明をしてきたところが多いのであります。

そうしますと、「タターガタ」は一つには、お釈迦様は真実、真如を悟った人、語呂合わせて真如を合点した人という意味と、もう一つには、真実（タター）を語る、説法する（ガタ）人という意味があることになります。これで、もうおわかりと思いますが、如来、仏様たるものは、説法する事が、重要なことから、それ故に、極楽浄土でも説法をされるのであります。このように見てきますと、仏教にいかにお話が大切かがわかり、極楽で尚説法があるかが理解されましょう。私なりに少年時代の謎が解けました。

お釈迦様の悟りを知るのに、禪家では言葉やお話によらない拈華微笑（ねんげみぎょう）という事があります。それは、ある時お釈迦様が説法されるというので大勢集まったが、お釈迦様は一言もおっしゃらないで、手で一本の華を拈じて微笑して見せられたということです。それを見た迦葉尊者というお弟子だけは、その意味を分かった、つまり、言葉で理屈を説かれて分かったのではなく、単純なその華を拈じて微笑するという事だけで、悟りへの心の高まっていた迦葉尊者は仏の心が分かったということであり、心の高まりが仏と同じようになって

ていれば、意自ずから通じるといことを禪家ではいうのであります。このように、話を仲立ちとしない、いわゆる、以心伝心という伝え方もあるということです。でもこれは在家一般には、かなり、難しいことであります。私どもはお話を通じてしかよく分からないのであります。

ねずみ経と小話二つ

さてそこで、今言いました『ねずみ経』の荒筋を言います。これはどなたの創作か忘れましたが、ある低学年向き童話集に載っていたものです。

昔々、ある峠にお婆さんが茶店を開いていました。ある時麓から仙台平の傍をはいた立派な侍が立ち寄りお茶を所望しました。おいしいおいしいと言って何杯もおかわり（このところを童話的に誇大に表現すると子供たちは喜びます）を致します。

侍がお代金と言うと、婆さんはお代はいらない、立派なお侍さんだからお経を教えてくれ、と言います。お経は知らない困って断るお侍を、お婆さんは無理矢理に、お仏壇の所へつれて行って後ろでかしこまっています。えいままよと侍は鈴を一打、「チーン」、前をみると蠟燭立、花立てがあるので、「蠟燭立やー、花立てやー」とやった。お婆さんは、それを復唱します。次に鼠が顔を出した、すかさず、「鼠が一匹チヨロチヨロー」。お婆さん復唱。また一匹。「またもや一匹チヨロチヨロー」。お婆さん復唱。もう出てこず、「これでおしまい」で「チーン」鈴一打。お婆さん復唱。峠のお婆さんはとても喜び、毎夜

毎夜、このお経を繰り返し繰り返しあげていました。

ある夜の事、麓から手下二人を連れた泥棒がやってきた。まず手下（一）の一人を偵察にやる。ちょうどその時、お婆さんが夜のお経をあげ始め、鈴を一打、「チーン」蠟燭立一、花立てやー。泥棒がのぞいた時、「鼠が一匹チヨロチヨロ」。手下（一）びつくり、お頭に注進。「変な婆さんがお経をあげていて、自分に気づいたらしい」と。お頭はすぐ手下（二）をやる、と、「またもや一匹チヨロチヨロ」。すっとなでお頭に「すごい婆さんだ、仏様の方を見ていて後ろが見えるなんて」。頭は、そんなことがあるものか、とそつと見に行ったら、「これでおしまい」で「チーン」鈴一打。びつくり仰天、泥棒たちは逃げていきました。

本誌一九九四年十月号松谷みよ子著「民話語る老いと救い」参照

他愛もないお話ですが、目の前の蠟燭、花立て、鼠と分かりやすく、語調もよく、聞く方は終わりには一緒になって話するくらいです。自然に、お経やお参りへの親しみが伝えられるようです。

小話は私が少年の頃、やはり寺の日曜学校で、山内のお坊様が交代で童話に來られた時の話です。中身の無いお話ですが今だに覚えています。その一つは洪水の話。

靴がぶかぶか流れ出しました。胡瓜も流れて、そのうち靴の中に入りました。窮屈窮屈といいましたとさ。

もう一つは、ある朝お百姓さんが畑に働きに出かけました。途中で鳥がお百姓さんを見て、「クワークワー」と鳴きました。お百姓さんは「あ、鶺鴒を忘れた」といつて取りに帰ると、鶺鴒が「トツテコウカ、トツテコウカ」と鳴きました。お百姓さんは言いました、「お前

は遅いわい」と。

このようなお話でお子さんとすぐお友達になつて心が通います。

お経もお話

お経も、同じように仏さまと衆生を結ぶ千年、二千年の実験を重ねて、我々の先人、先輩たちが、我々に伝えてくれたお話です。一つ一つの表現、叙述にも深い意味があり、棒読みにするだけでなく、よく考えて意味を受け止めたものであります。

『華嚴經』というお経があります。奈良の東大寺を中心とする華嚴宗のお経であります。同時に、日本の政治形態、思想にも深く関わっています。その経の中心となる仏様は毘盧遮那―仏といいますが、翻訳すると太陽―仏ということで、太陽に照らされると、蓮池の無数の蓮が開く、陽光に開くその華には、小さな仏の世界が展開する、いわば小仏世界であると示されます。今、仏様を蓮台の上にお飾りするのはその故です。この太陽と蓮の關係は、大和政府と地方官庁、総本山東大寺と地方寺院、時代下つては、幕府と諸大名、総本山と各地方寺院という政治形態、さらに、日本の全体主義とでもいうような形を作り出すようになったと考えられます。

『華嚴經』『入法界品』には善財童子という求道者が次々と五十三程の指導者を訪ねて遍歴する姿が説かれています。これは東海道五十三次の元になったと伝えられています。奇しくも五十三次のゴール京都という名もこの経には出ています。このように日本の政治や

国土に影響を与えて今日を生かしています。

また、この経の最初に、仏が瞑想の座から目覚められると、その居住地の祇園精舎のあ
る土地は水平線の方まで急激に限りなく拡大し、地面が清浄になり、地面には寶石が布か
れる、建物は宝物で飾られてしまう、などと説かれています。これはどういう事なのでしょう
う。それは、太陽が出ると、夜見えなかった大地が瞬く間に照らされて視野が広がって
いく様を、仏の光が世界に広く広がる様として説明し、夜の暗黒で危険な大地が照らされ
明るくなったのを、また、朝露がダイヤモンドのように煌めくのを、仏目覚めて大地が宝
石で布かれていると述べているのでしょう。楼閣の建物が寶石でびっしり飾られていると
いうのも、夜から覚めて朝日に照らされて姿が全容を表したことを、そう述べているので
あります。

このように、何となく難しい『華嚴経』の文章のお経も、我々は読みとらなくては意味
がないので、その中には、仏様からの分かりやすいメッセージが込められているわけであ
ります。

色々な形の仏教を伝える話

このように考えると世の中には様々な姿のお話で、仏教を、お念仏の教えを、我々に先
輩たちが作ってくれていることに気がつきます。『源氏物語』は『法華経』、『平家物語』は
『法華経』、『観無量寿経』のそれぞれの考えに立って制作されています。これらは物語で、

歴史の事実を述べているのではなく、歴史を材料にして、仏教を、お念仏の心を文学的に、語り物風に自由に表現しています。『平家物語』で、奈良の寺、民家を焼いた平家の総大将平重衡が法然上人に会って受戒したというのは嘘だといわれますが、私はそのように歴史的事実ではないが少なくとも十悪五逆の凡夫として念仏に救いを求めた平重衡の心境を述べた真実である、史実ではないが、真実である、と思っています。

以前述べたことですが、『かもめのジョナサン』という本が、大変な連続ベストセラーだったことがあります。しかし、人間並みに高等飛行術を体得した鷗の物語ですが、それは仏教―禪―の理解のあった著者が、仏教の神通力で、移動せず、百里の先を知る、百里に飛ぶ、というような考えを以て書いているのに気づかなかつたら、不可解そのものであつたでしょう。事実みんな分らない、おもしろくない、という読後感なのに、あれほど売れたのは、多少分かつたのでしょうか。実際、訳者の文豪も分らない、という感想を書いています。感想中に仏教に一言もふれていないから、私はさもありなん、と思います。ともかく仏教から見ても、よい話の本でした。

アンデルセンの童話『旅の道連れ』『鐘』『芥川龍之介の『数の中』(映画『羅生門』)、黒沢明監督の『素晴らしい日曜日』など、仏教の世界観や、心に似ており、煩惱を写していると、思いますが、仏教者の評価と解説がないのが寂しい。心ある方は、仏教を頭に置いて読んでみれば、なるほどと思われましょう。いろいろな形で仏教を表現する話は多いのです。それは一つには日本という仏教の風土によるものが多いからでしょう。

(東京・天光院住職、芝学園理事長)



ストリートチルドレン
と日本の若者たち
(カルカッタ)

二つの世界 の——子どもたちの受苦—— 子どもたち

楠原 彰

子どもたちの受苦

昨年夏インドに行ったときのことです。毎年学生たちとお世話になっている南インドの村々での滞在を終えてカルカッタの街に戻ったら、マザーテレサの死に遭遇しました。

マザーとお別れする行列に、四・五人のストリートチルドレンと一緒に並ぶことになりました。彼らは警備の警官が近づいてくるたびに、私たちに体をくっつけてきて盛んに手を握ろうとするのです。「おまわりさんが怖いのか？」と聞くと、しょっちゅう殴られているらしく、「うん」とうなずきます。

ブラジル、ケニア、南アフリカなどでは、警官や、商店主に雇われた用心棒によって銃で打ち殺されたりするストリートチルドレンも少なくありません。

しかし、さすがこの日だけは、警察官も役人も市民も、社会や国家から打ち棄てられた彼らのような人々のために一生を捧げた、マ

ザーテレサとのお別れの行列や彼女の遺体を安置する教会堂から、彼らを排除することはできませんでした。

ストリートチルドレンたちも傷だらけの汚れた小さな手を合わせながら、マザーに最後のさよならを告げていました。

現在、インドだけでも二四〇万人のストリートチルドレンがいるといわれ、ユニセフ（国連児童基金）の「子供白書」は全世界のストリートチルドレンの数を三〇〇〇万人以上としています。ストリートチルドレンとは、わかりやすくいうと、敗戦直後の日本の「浮浪児」のように、食べ物も寝場所も自分だけの力でさがすほがなく、自分で自分の身を守らなければならない子どもたちのことです。そんな彼らの中からインドの一人の少年の例を紹介しましょう。

「十三歳のアラムは、ニューデリー駅のプラットホームで暮らしながらポーターとして生計を立てている。彼は家族をプーナに残し

て一人でデリーに出てきた。アラムの父親はオート力車（人力車）の運転手でひどい酒飲みだった。彼は、五回再婚したため、家には十五歳以下の子どもが十人もいた。父親はアラムの母親と縁を切り、アラムの母親とその三人の子どもたちは家を追い出された。母親は、縫物をして生計を立てていたが、一日、十ルピー（約33円―引用者）では四人が食べていくことはできなかった。そこで、小学校三年生だったアラムは働くために学校をやめなければならなかった。アラムは四年間、パン屋で働いたが、ささいなミスを侵しては店長に殴られてばかりいた。こうしたことに、耐えられなくなった彼は、ついにある日デリーに出てきたのだった。（甲斐田万智子「子どもの権利条約からみたインドのストリートチルドレン」、井上ひさし編『憲法を考える本』光文社文庫、一九九七年所収）

今、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカといった地球の南側の世界では、毎年一二〇

〇〇万人（一日三五〇〇〇人）もの子どもたちが飢えや病気で若い命を終えています。世界中には食べ物や薬品があり余っているにもかかわらず、彼ら・彼女たちのもとには、なぜか届かないのです。この悲しい若い命を救うことができるのは、基本的には、外国の援助などではありません。

南の国々の多くの人々が貧窮と旧習にあえぎながら、暮らしている農村が豊かになり、農村の女性や子どもたちの生活が民主化されなければ、どんなに外国からの援助が投じられたところで、南の子どもたちの受苦は、果てしなく続きます。

その日本や欧米といった「豊かな」北側諸国からの援助も、南の農民たちを豊かに自由にするというより、都市と農村の較差を一層広げ、農民の暮らしを解体し貧窮化させ、人の自立を妨げている場合が少なくありません。

私が学生たちと毎年お世話になっている南



南インドの小学校で

インドの農村は、貧しい土地なし農民が多いところだ。主としてギリジャン（山岳民族）やハリジャン（アウトカースト）の村々だが、相互扶助の「サンガム」（組合）をつくり、村人同士が力と知恵を出し合って、階層差や障害差、性差などを超えて助け合いながら、都市のスラムに流浪しなくとも村で暮らして行ける豊かな人間の暮らしをつくりだそうと一生懸命に努力しているところだ。

日本ではなかなかイイ人間の表情をみせてくれない若者たちも、この村々で元気に働く子どもたち、水牛、森の精霊などに取り囲まれて暮らし始めるにつれて、実にイキイキとした精気に満ちた表情に変わっていきます。

どこからともなく、一人一人の日本の若者たちにも「生きてていいんだよ」という声や眼差しが送られてくるからでしょう。なにをかくそう六〇歳に近い私にも、南の世界を歩くといつもその声が聞こえてきます。これが私の元気の源です。

南の世界の子どもたちが、胸もつぶれるような受苦・受難にあえぎながらも、逞しく明るく、生きて生きて生き抜こうとしているのは、南の世界の大地や森や海には、また村や街の人々の暮らしの中には、かつて日本列島の森や大地にも豊かに満ち満ちていた、「生きていいんだよ」という何ものかの声や眼差しが、まだたしかに存在しているからだと思います。

南の世界からもらった宝もの

私はこの三十年間、時間とお金を作ってはアフリカやアジアの諸地域をトボトボと歩いてきました。そこで私がいたいたというか、気づかされた哲学（宝もの）が三つあります。その一つは、「今は、明日への途中ではない」という哲学です。今の人と人、人と神や精霊、人と自然、人と仏様、……との豊かな交わりにまさる大切なものはない。今のこうした交わりが豊かてなければ、明日は幸せ

なはずはない、という考え方です。南の人々の多くは、今でも、人生を豊かに味わいながら生き合う生の達人だと私は考えています。

中学校は高校の、高校は大学の、大学は就職の、今はある目標達成のための「途中」である……といった、いつも「途中の人生」しか生きてこず、豊かな「今を味わいながら生きる」ことを知らずに、というよりも避けてきた私を、この「哲学」はどれほど自由にくれたかわかりません。

二つ目は、「君は君のままでいい」という主張です。これは南アフリカの三世紀を超えるアパルトヘイト（人種隔離・差別）政策とたたかってきた黒人たちの運動（黒人意識運動）から学んだものです。南アフリカの長い白人支配が黒人や混血の人々に植え付けてしまったメンタリティー（心性）に、自由になること、人間になることは、白人に近づくこと、白人のように生きること、というものがあります。

こうした卑屈な心性から自由にならないかぎり、アフリカ人の解放も自立もありませんでした。一九六〇年代の終わりから七〇年代にかけてステイヴ・ビコやランペレ・マンペレらの黒人の若者たちが始めた運動は「君は君のままでいい。自分自身の人間の尊厳に目覚めよう」という新しい意識化の運動でした。この運動こそが黒人やカラード（混血）の子どもたちに勇気を与え、大人たちを動かし、アパルトヘイト体制に修復不可能な亀裂を与えたのです。新生南アフリカを運営している人々の中心は、この世代の人たちです。自分自身をどこかで嫌悪し、自分自身以外のものになろうと醜くあがいていた若い時代の私をも、この「君は君のままでいい」という黒人意識のメッセージは、どれほど楽にさせてくれたことでしょう。「そうだ、私は私のままでいいのだ。」

さて、私が南の世界からもらった三つ目の宝ものは、すでに前述しましたが、南の世界

にはまだ「生きていいんだよ」という、人間の生を何よりも励ましてくれる声や眼差しが満ち溢れているという発見です。この眼差しや声に励まされないと、子どもたちは生き生きて生きて生き抜こうというエネルギーと希望を、体と心に膨らませることはなかなか難しいということです。

人間は、とりわけ幼い子どもたちは、他者や自然や神祕的世界との日常の豊かな交わりのなかで、「生きていいんだよ」という声なき声、見えない眼差しに励まされながら、自分自身の力に気づかされ、人間として自分として、生き抜いていく力と希望を、内に孕むことができるのではないのでしょうか。

子どもたちの希望

物質的に「貧しい」南の世界の子どもたちの受苦について述べてきましたが、物質的に「豊かな」北の、なかでもとくに「豊かな」日本の子どもたちの受苦も大変なものだと私

は考えています。私はどこにも存在しない、という自分自身の不在感と、本当はだけれども愛されていなければ必要とされていないという感じは、日本の多くの子どもや若者を苦しめているものです。「酒鬼薔薇聖斗」の「透明な存在であるボク」とはそのことでしよう。

南の子どもたちのような生きて生きて生き抜くエネルギーと希望から、日本の子どもたちが引き離されてしまっているのは、明日の幻想（豊かで快適で便利な暮らし）のために「今を味わいながら生きる」ことが許されないからでしょう。また、なにかになることを強制されて、自分自身であること、自分自身として生きることを、誰からも期待されていないからでしょう。

そして何よりも不幸なことは、日本の子どもたちの周りのどこからも、周りの誰からも、「生きていいんだよ」というやさしい声も聞こえず、そう励ましてくれる沈黙の愛に

満ちた眼差しも、もうどこにも存在しなくなったからでしょう。

飢えと病気と戦争（地域紛争）に苦しむ南の子どもたちと他者・世界・自然・神や精霊や仏といった神秘的な世界を奪われ「自分自身の不在」に苦しむ日本の子どもたち。

この南と北の二つの世界の子どもたちの受苦をつないでいるものは、いったい何なのでしょう。二つの世界の子どもたちの本当の自由と解放は、つまり彼らの希望というものは、二つの世界の子どもたち自身が、それをつくりだした大人と一緒にあって、その課題と構造（関係）を明らかにし、その課題の解決のために体を使って参加するとき以外に実現することはないと思います。

子どもたちに、受容と沈黙（祈り）を！

（国学院大学教授）

表紙は語る

車窓から

月

写真と文

川井 聡

乗降客の途絶えた
駅には哀愁だけが残る
あるいは不意に
客車の窓の木枠から
懐かしい旅
の記憶がよみがえる
鉄路の果てに
彩いていくひとり
ひとりの人生

根室本線 音別駅 付近

北海道 釧路市近郊

ほんの十年くらい前まで、
旅の主役は汽車であった。

すでに蒸気機関車は消えていたが、それでも
国鉄のローカル線には、木造の車内に、硬質
な椅子、風雪という装飾が施されたような車
両が待っていたものだ。そこには、時間と空間
を混ぜたような旅の匂いが充ち溢れていた。
これから一年、汽車に乗ることが旅だった頃
の光景を楽しんでいただいたいと思います。
それは、いわゆる「バブル」直前の日本の鉄
道風景です。

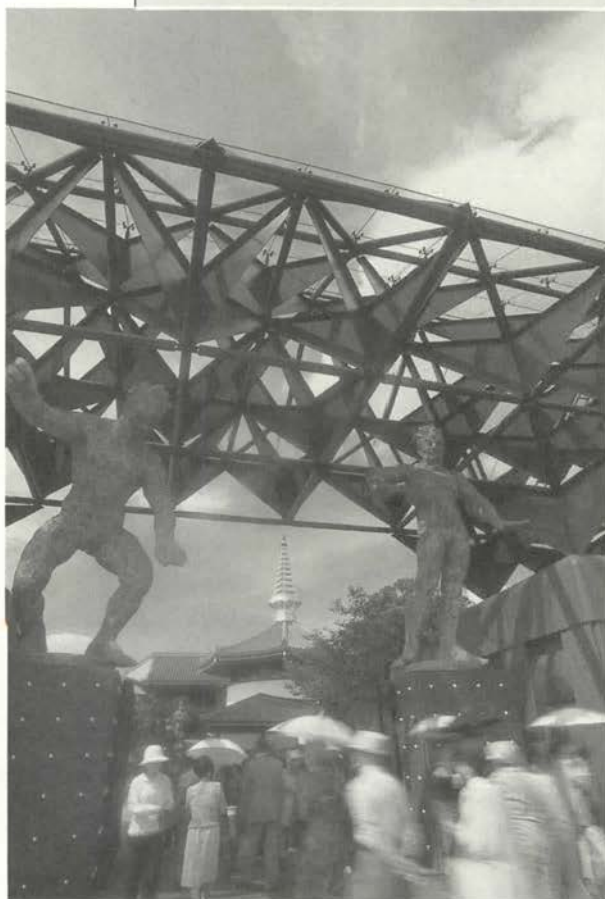
滝川から釧路までの鈍行列車。何でもない駅
で20分や30分の停車は当たり前。急行や特急
につきつぎ追い越されながら、約300kmに1時
間をかけ、まるで漂うように走っていた。

かわい さとし 大阪生まれ。小学校の頃の「SLブーム」にはまりカメラを手にする。
現在は、週・月刊誌などで人物から商品まで幅広く活動中。

寺院紀行

大阪天王寺

一心寺



文／真山剛
撮影／夕力才力邦彦

「逢阪二丁目の交差点へお願いできますか」

助手席に座るやいなや、同行してくれた編集者がタクシートの運転手さんにこう言うのと、

「逢阪二丁目、いまは一心寺前言いますねん、その交差点」

大阪弁でこう返ってきた。

「へえー、一心寺前の交差点に名前が変わったんですか。いつからなんですか」思わず後ろの席から割り込んでしまった。

話によるとごく最近、今年（平成九年）の三月頃だという。

交差点の名前というのは簡単に変わるのだろうか、そう思いながらミナミの道頓堀際からかつての逢阪二丁目、現一心寺前の交差点に向かう車にゆられた。

下寺町といわれるお寺が並ぶ通りを左手に、突き当たりを左折し坂を上り始めると歩道を行き交う人が増えてきた。

「お客さん着きましたよって。あすこが一心寺さんですわ」

タクシィから降り立って見ると人、人、人である。

後日談だが、交差点の名前がどうして変わるのかが知りたくて、大阪府警と天王寺署へ電話してその理由を聞いてみた。

「ええ、逢阪という地名は確かにいわれのある名前です。ですが、あえて目の前にある一心寺の名前にしたのは、一心寺が半ば公的に近



断酒祈願が成就するといわれる本多出雲守の墓。奥の伽藍は開山堂

い建物、つまり納骨祈願法要や供養で多くの人がお参りにくる場所
で、そうした参詣者の利便性を考えて、署から本部（府警）に申請
したのです」天王寺署は実に明瞭簡潔に答えてくれた。

そう、今回訪れた寺は「お骨仏の寺」として有名な大阪天王寺の
一心寺だ。

お骨仏の骨仏とは、納骨された人骨で造られた仏像のこと。一心
寺でこの骨仏が十年に一度造立されている。平成九年には第十二期
の骨仏開眼大法要が四月二十一日に営まれ、四日間でのべ二十五万
人の参詣者がお参りに来たという。これだけの人が集まるのでは確
かに公的に近い場所である。

一心寺の歴史は文治元年（一一八五）、法然上人が日本初の官寺で
ある四天王寺に参詣し、当時荒陵（あらはか）と呼ばれたこの地で
日没の光景を見て念仏を称えたことから始まる。その後法然上人は
ここに荒陵の新別所という名の草庵を結び、日想観（にっそうかん）
というお勤めをした。日想観とは阿弥陀仏のいる西方へ沈みゆく太
陽に向かって念仏を称え、極楽往生を願う念仏修行で、この上人が
結んだ日想観のための草庵が現在の一心寺である。

一心寺は法然上人御遺跡二十五霊場の第七番目でもある名刹中の
名刹だが、その歴史を緋く前に骨仏の話に戻ろう。

日本で最初に建立された官寺、四天王寺



もともと仏像とは仏教を開いたお釈迦さまが亡くなられて数百年してから造られ出したものだが、その仏像を人骨で造り上げるのは珍しい。その辺りのことを『一心寺風雲覚え書き』（昭和五十七年一心寺発行）はこう記している。

「骨仏造立のことは史上その類例を見ない。——中略——なには兎も角、人のお骨を集めてそれを練り合わせて造り上げた仏像というものは、世界広しと雖も、どこの国にもない、ただわが日本の大阪の一心寺にあるだけだから珍しい。正に世界の珍である。

この骨仏造立第一号の名譽は当山第五十二世陽譽真諄上人がこれを担ふ。陽譽上人がこの珍な企てをするまでには、嘉永四年以来日々何十となく納めに來るお骨は年々積んで山の如く、益々殖えてゆく。それでこれを最も鄭重に御祀りしたいという心から、これを練り合して仏像に仕立てることにしたのである」（抜粋）

こうして造立された仏像は嘉永四年（一八五二）から明治二十年（一八八七）までに納められた約五万有余のお骨で造られた。以後は約十年を一期として一骨仏を造立することに内規を定め、現在に至っている。

なにも人骨で、と気持ち悪がる人がいるに違いない。しかしそれは誰かわからない他人だからの話で、自分の先祖、あるいは妻や夫

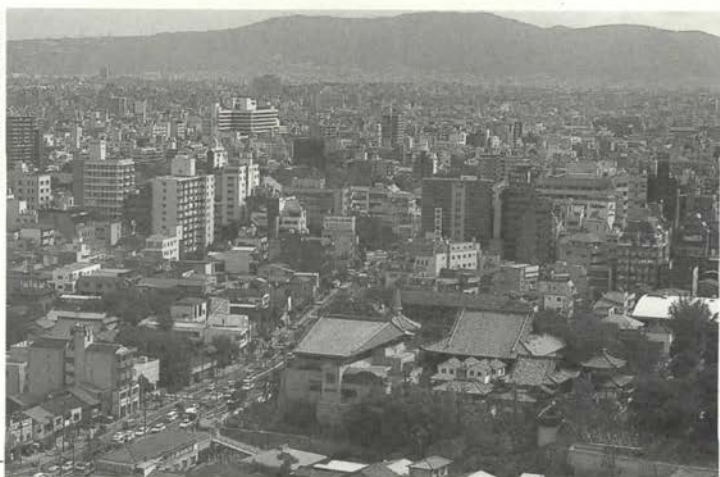
となると、さてどうだろうか。もちろん何万人という方のお骨だが、それは仏像という崇拜の対象に形を変えようという意志を同じくした者同士である。そこに多くの子孫や親族が集まり、香雲が絶えないのは骨仏を通しての先祖崇拜や仏教精神が廃れていないからである。お骨仏の寺一心寺の納骨堂はいまでも、そしてこれからもいっもお参りの人々にぎわうに違いない。

さて、歴史に戻ろう。本堂をはさみ骨仏を納めた納骨堂の反対側に建つのが日想殿である。この日想殿は大広間や座敷がある檀信徒会館で、昭和五十二年に竣工された。

命名は法然上人の日想観にちなんだもので、高台の眺望の開けた地形を活かしている。当時は摂津の海まで見えたそうだ。今回、大阪名物の通天閣から一心寺を見てみたが、確かに立地条件には恵まれている。そしてこの立地条件を活かした武将もいる。徳川家康である。豊臣家と徳川家の最大の決戦である大阪夏の陣で家康が本陣にした茶臼山がここにあたる。昭和二十年三月に戦火に巻き込まれ焼失するまで、家康が戦略を練った小堀遠州作の八窓（やつまど）の茶室や大久保彦左エ門が植えた椿などがあった。ちなみに一心寺は坂松山高岳院一心寺というが、坂松山は家康の命名である。

徳川の天下となり、家康の庇護のもと興隆したが、名刹とてさび

通天閣から望む一心寺



れないはずがない。それを救ったのが、第五十一世顕秀が安政三年（一八五〇）に始めた常施餓鬼法要で、この法要で一心寺の名前は一躍近畿一円に広まったという。その後も廃仏毀釈や太平洋戦争で多く被害を受けたものの多くの信者に支えられ今日に至っている。

この一心寺の第五十九世が高口恭行現住職である。高口住職はもちろん浄土宗の僧侶だが、僧侶になる以前から、いや現在ももう一つの職業をもっている。建築家であり、工学博士である。

京都大学大学院時代に大阪万博の基本計画を担った京大グループの若手として走り回り大いに活躍したという。大阪万博といえば高度経済成長の最中の昭和四十五年、日本が世界にその存在を大きくアピールした記念すべき行事で、基本計画を京都大学、実施計画を東京大学が受け持った日本をあげてのイベントであった。

その一役を担った高口住職だけに、万博の翌々年の昭和四十七年、三十二歳でこの一心寺の住職となつてからも、建築家としての腕をふり続けている。先代が血のにじむ苦勞をして復興した伽藍建立を受け継ぎ、日想殿、黒門をはじめ境内を整備した。また、対外的な発信基地をして門前の花の卸市場だった建物を入手。「ボロの体育館みたいなもの」ながら一心寺日曜学校、門前浪曲寄席、ボクシング、さまざまな劇団の演劇に利用され、昨年ぐらいから稼働率が上



大阪名物通天閣と展望台に奉られている幸運の神様ビケン像

がり、七十から七十五パーセントというから、ボロどころか立派な情報発信基地になっている。

「出入り自由の仏教文化クラブが作りたいですね。檀信徒を集めたオープンな会員制の一心寺クラブをいろいろな形で作っていききたいですね」

こう語る住職はいま大きなプロジェクトに取り掛かっている。

『茶臼山・夕陽丘プロムナード構想』がそれである。二〇〇七年を構想実現の目標にして、高口住職が代表となって進めているプロジェクトだ。立派なパンフレットにはかなり具体的なプランがイラストや写真入りで説明されている。パンフレットの表紙は、やはり浄土宗のお寺で高口住職による設計の応典院を手前に、構想の中心のメインプロムナードとなる道の写真で飾られている。

このプロジェクトの目的を敢えて一言でまとめるならば、「既設の歴史の散歩道を拡充し大阪のアイデンティティ空間」を作ろうということなのである。

つまり「大阪の新名所をこしらえたらか」ということだ。

もっとも簡単にいうことはできるが、これはまさに都市計画そのもので、先に述べた高口住職の経歴ならではの計画である。そして、この計画も今に始まったものでなく、十分な準備がなされている。



高口住職が設計した応典院。応典院は下寺町に並ぶ浄土宗の寺院だ

平成八年に「なにわ人形フェスティバル」をプロムナードの入り口にあたる大蓮寺、応典院から一心寺へと続く下寺町の寺院と合同で開催、二万人の人を集めた。またかつて毎月二十一日の大師の日の下寺町がまとまって多くの参詣者を迎えていた経験もある。こうしたお寺以外にも、大阪市や地元との連携も十分にとっているという。建築家としての人脈が大いに活かされている。

取材をしながら、決しておごりではない、溢れんばかりの自信を十分に感じたのは、やはり住職として、建築家としての実績のなせるわざなのであろう。

最後に建築家としていま一番気に入っているものなんですか、と聞いてみた。思いもかけぬ答えが返ってきた。境内のあちこちに置いてあるシーサーを象った灰皿だという。

取材協力のお礼の後、帰りがけにその灰皿、シーサーを見つけた。大きく開いた口にステンレスの回転板がついている。そこに「I'll help your smoking」と彫られていた。愛煙家である高口住職からの一心寺を訪れる愛煙家へのメッセージだ。

そしていまお寺から街へ向かう高口住職のメッセージはきつとこ
うだ。『I'll help our Osaka development.』

(ルポライター)



愛煙家の高口住職がいま一番気に入っているのが境内にあるシーサーを象ったこの灰皿

日本人の
こころを問う

本間千枝子

昨秋九七年の九月、私が世話人代表をつとめている「日本人のこころを語る会」は、アメリカの三都市で日本酒をテーマに、「ザ・ワールド・オヴ・サケ」と題するシンポジウムを催した。フィラデルフィア、ボストン、ケンタッキー州のレキシントンの三ヶ所、合計で千人ちかくの参加者を集めたろうか。その評価は私たちの予想をはるかに上まわり、各地の人びとの理解は深く、身にあまる感謝もされて、企画主催者としては自画自賛、「大成功」の報をおみやげに帰国した。

しかし、あらためて考えれば、この国際シンポジウムが実現するに至るまでの年月の何と長かったことだろう。そもそもは七〇年代後半から八〇年代の、日本経済が世界で突出して走っていた時代、貿易摩擦の小さな小さな緩衝役を果たすことになれば、と思いついたアイディアだった。当時から事情をよく知るメンバーの一人は、最初のセミナーの後で、啗酒交流パーティーの開始を告げる和太鼓が鳴

り響くと、思わず目頭をおさえたのだった。

七〇年代の後半から、日本人は経済繁栄で心が驕ったのか、急に、世界で一番進んでいるのは日本で、他の先進諸国にもはや学ぶべきものなし、というような言葉を口にするようになった。ヨーロッパは遅れていて、イギリスはたそがれ、アメリカは広大な田舎というセリフを何度聞いたことか。

古くから日本を知り、日本人の世話を戦後から何くれとなく引き受けてきたアメリカの人びとから「最近の日本人は急に民族性が変わったようだ」と言われた経験もあった。私は、自分の夫は学者で、それも専門が歴史。経済の世界のことは何も分からない。しかしながら、物を作って売るのなら、それを買い支えて下さる方がいないかぎり、商売は成り立たないくらいことは分かる。これは国と国という大きなスケールとなっても同じであろう。ところが、製品が優れていれば、先方が買うのはあたり前と思う論理がまかり通っていたのが

八十年代ではなかったろうか。日本人一般の心の中に、今日生かされていることへの感謝が足りない時代であつた、と今もつくづく思う。

八十年代の半ば、私は主婦で駆け出しの随筆家だったが、何か居たたまれぬ思いで日本の社会を見つめていた。日本人とは、本来は今ある姿とは違ふ、もっと謙虚な人間性を持った人びとであつたのではないか。他への配慮にすぐれた人びとが多くいる集団ではなかったのだろうか。私の胸の中には沸々と四半世紀も前のある場面が浮かび上ってくるのだつた。

それは米国ニューヨーク市のコロンビア大学で、ドナルド・キーン先生ほか多くの日本研究者を育てられた角田柳作先生の思い出である。角田先生は一九二八年から五五年まで、戦争中もコロンビア大で教鞭をとり続けた方だつた。私がニューヨークでその聲咳に接したのは五六年から六〇年の間だつたが、当時先生は八十歳になられ、奥様はすでになく、

おひとり暮らしだつた。

ある時、先生は少人数の集まりで話をされた後に、しばらく瞑目の時間をおいて、それからぼつんと、「日本はいい国です」といわれた。当然そこには「先生、日本がなぜいい国なのですか」という質問があつた。先生が日米戦争の最中、日本に帰還されることなくアメリカ社会に留まって居られたことを思えば、この期に至つて日本を「いい国」と考えられることは不自然でさえあつた。最晩年にちかく、先生はやはり郷愁やる方なき心境にたち至られたのだろうか……私はいぶかつた。質問に対しての御返事もやや時をおいてから、先生はいわれた。

「日本は女性がすぐれているからいい国です」
するとまた次の質問があつた。

「日本の女性はなぜすぐれているのですか」
それにはすぐに

「日本の女性は表にはあらわさぬ他への深い配慮にすぐれている、わが身を忘れて他を思

いやる人びとなのです」

というような言葉を漏らされたのだった。

先生が亡くなられたのは六四年だったが、それからほぼ二十年ちかくが過ぎ去った八十年代、日本人は内でも外でも、何かが確実に変わりつつあった。

その後も先生のこの言葉は折にふれて私の脳裏に浮かんで、しきりと日本、日本人、日本人の心というテーマをつきつけては形にならない問いを投げかけ、日本の女である私自身の反省をも促すのだった。

八十年代半ば、私は何人かの友人と「日本人の心」設立委員会を発足させた。文学の中に描かれたさまざまな「心」を、たとえば日本人は自然をどう考えているのか、主従、先輩という間柄における愛はどんな形をとってきたのか、家族は何を核として成り立っているのか、死をどういう形で受けとめてきた国民か、恋愛の理想は……といったテーマを生活の中の視点で読み直し、できれば分かり

安く書かれた文学を見つけてそれを翻訳し、海外の人びとに読んでもらえるホームライブラリーを創ろうてはないか、という遠大な計画だった。翻訳出版の暁には、それを海外の学校に寄附する。

構想は果てしなく大きなものだったが、「感動的な企画だからぜひ進めてみなさい」と仰って下さる企業の方もあり、私たちはプログラム化のために頭をひねり、説得に歩きはじめた。

ところが、一年もしない内に、この企画を最初から共に練り上げて支えあっていた私の大学時代からの友人が急逝し、続いて私たちに応援を惜しまないと言われた企業の方も帰らぬ人となられた。二人の男性は共に昭和ひと桁生まれ、戦争の時代を動員中学生として働き、戦後の貧困期に学生生活を送り、やがて日本復興の支え手として生きた人たちであった。

プロジェクトは挫折したまま、私も具体化に

つてはほとんど放心状態で何年かを過した。

九〇年になって、私は志を同じくする新しい女性の友人たちにめぐり逢った。日本人を客観的に眺めることができる一方で、自らの生まれた国として将来を深く考えている人たちが多かった。ほとんどが家族の護り手として中年までを家の中で過ごし、それから働きはじめた人たちが多かった。それぞれが異なるヴォラント・グループに属して、文化的なセミナーを催したり、社会に役立つ企画を考えたりしている共通項があった。

彼女らと共に私は日本の社会がこれまで見逃してきたものを考え直すことになった。それはいわば家の中であって、いわば陰で社会を支えてきた女たちの視点から、日本を見、海外の人びとに、日常生活の中にある日本人のここを伝えようとする試みでもあった。

日本人のここをまず自分たちもよく知ろうと、このグループは勉強会を開くことと決めた。勉強会のキープ・パースンは、大衆文化に

造詣の深い哲学者の鶴見俊輔先生にお願いした。グループだけでお話を伺うのではもったいない。会はずべて公開にしようと思える。

メンバーの女性たちが一番こだわったテーマは、漠然とした日本ではなく、日本人のここはどのようにして形づくられてきたか、だった。

鶴見先生からのご提案もあって、公開の会は、その都度テーマの切り口が変わるごとに一番ふさわしいゲストを対話者として迎え、対話シリーズのシンポジウムとなった。

「日本人のここを考える会」が誕生した。そしてこれまで四回、「映画を通して語る日本人のここ」をはじめとして、歌、漫画、物語などをテーマの切り口に、鶴見俊輔先生がホストとなって、佐藤忠男、永六輔、四方田犬彦、池澤夏樹、の諸氏をお迎えしてシンポジウムが催されてきた。

一年に一度の会だが季節はいつも真冬、会場は銀座ガスホール。神戸に地震が起った年以外はいつも満員札止めとなった。二十代から

八十代まで、常連化した参加者たちで賑わう。

いずれのテーマの時も鶴見先生は質問者として、一年ちかくその準備に費やして下さり、内容は深く、参加者のほとんどが満足して下さる会である。このシリーズの記録は、近々に岩波書店から出版されるという幸せなおまけもついた。会には現在、これを翻訳して「日本人のころ」を知るための書として海外で出版する、というプロジェクトが残っている。

さて、アメリカで催された「ワールド・オヴ・サケ」は、鶴見先生はご不在だが、このシリーズの延長線であると思う。日本名「酒」を通して語る日本人のころ」は、アメリカの全米日米協会連合と各地のジャパン・ソサイエティとの共催で開かれた。

日本人のころを具体的に反映する生活の中に分かりやすい文化とは何か。女性たち何人かが額を寄せあつて考えたところ、それが「日本酒」ではないかと気付くのに時間はかからなかった。米と清冽な水、物事の質にか

ける日本人の心意気、そして神が介在するすばらしいケースではないだろうか。風土までも含めて、これ以上重層的に日本を象徴するテーマはちよつと見つからない。

しかもお酒を飲むことは人類共通の楽しみではないか。各国が民族の酒を持っている。それはおたがいにとって異文化でありながら共に分かちあい、飲びを享受できる幸せなテーマであらう。

「ザ・ワールド・オヴ・サケ」はセミナーとテイステイングで構成されており、各都市の会場で啤酒は人気沸騰だった。講師の下村満子さん（国際ジャーナリスト）は個人的体験から、女性が酒の席で互角に男性と語るようになってこそ、日本社会の質は向上するとスピーチ、会場からは盛んな拍手が沸いた。小泉武夫先生（東京農大教授 発酵、醸造学）は「神と祭りと酒と日本人」、「米と水と酒と日本人」、「酒と日本人の人生儀礼」、「酒を敬う心と酒器」、「日本人の飲酒観」など

をトピックに、四十枚以上の見事なスライドを使って講演、それをアメリカ人唌酒師のセーラ・カミングス嬢が通訳にあたった。

参加者の好奇心は旺盛で、講師の先生方も私たちも、テイステイング会場で多くの質問を受けた。こうした切り口で日本の社会や日本人の物の考え方を語った会は初めてである、実に分かりやすい、とお誉めにあずかった。

参加者たちが猪口を片手に酒のブースで説明を聞き、楽しく歓談するのを眺めながら、私は企画者として、酒の法律が極端にむずかしいアメリカで、かくも沢山の日本酒を供給して下さった酒造メーカーをはじめとして、このシンポジウムを支えて下さったスポンサー、企業や個人の皆様に対して心からの熱い感謝と共にあった。

いくつものシンポジウムを体験した私たちは、「日本人のころ」について何を学んだのか。それをあらためて問わねばならないと思った。

(随筆家)

快適な環境を創造する

カジマ

KAJIMA CORPORATION

代表取締役社長 梅田 貞夫

本社 ● 東京都港区元赤坂1丁目2番7号
電話 ● 東京03(3404)3311(代)

この言葉やはり中国の禅宗から伝わった言葉のようです。

「挨」は押す、「拶」は迫るという意味で、両方がいっしょになつて前にある何かを押し退けて進み出るといのが本来の意味だそうです。

現代の我々にとっては、人間関係を前進させるためのものと解釈すればいいのですが、元々は、禅の道場で指導者が弟子と問答をして、その一言一句から弟子の悟りの程度を知るとい意味があつたそうです。

現在のように一般に用いられるようになったのは、臨済宗の公案を集めた『碧巖録』がきっかけで、そのなかに「一挨一拶」という言葉があり、その解釈が

「軽く触れることを挨、強く触れることを拶という。お互いを試験するために、言葉や策略をもつてする」とあります。

つまりは僧堂においてお互いが、相手の言葉や振る舞いから、その人となりを確かめるということの意味しているわけで、それが略されて挨拶となつたとい

挨拶

あいさつ

うことです。ここには一対一のピンと空気の張りつめた真剣勝負を思わせるものがあるように感じます。

「いまどきの若い者は挨拶の仕方も知らない」とよく愚痴をこぼしている年配の方を拝見しますが、確かに体裁などうわべだけを装った無意識の挨拶が目につき、本当に心のこもった、意識的に交わす挨拶という本来の意味が忘れられているようです。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六一五 京都市右京区

西京極郡町一〇三番地三

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五—三一四—七七六八

FAX 〇七五—三一五—三七五三

うまい野菜と



料理の話 ⑫

あるいは

セ
ツ
ツ
エ
ー
バ
タ
ケ

自家菜園の

ひそかな

愉しみ

我田大

匂いについて書くかと思っているのだ、野菜の。しかしどうもいま一つこれだという感覚が来ない。それでも一応締切りというものがあるので、もやもやながら見切り発車する。だいたい匂いというものがとらえどころのないから悪いのだ。色や形なしに、自分のからだが直接交流するから。それは味も同じだけれど、その語彙はまだ多い。

(もやもやをふりはらうように) ええい、

と。今日はこれからダイコトリ(大根とり)をしようというのだ。夜晴れて冷えこんで、朝、霜が降りた。水たまりにはザイ(氷)がはったり。だから、それらが解け、大根の葉の水が切れるまでの時間待ちに書きはじめたのだ。水がついてるとかまうたびそれが衣服や軍手につく。そのツベター・チビター(冷たい)こと。

豪雪地のこのへんは冬を野菜を畑にほっぽっておけない。降雪前にすべてをとりこまなければならぬ。そのダイコン編がダイコトリだ。タクワン用はもう二週間ほどまえにとつて、干してある。今日はカコイ用(保存を

カコウという)のだ。初雪をにらんでぎりぎりまで太らせてとろうと思っていたのだ。なるべく遅くとつたほうが、遅くまでとっておけるだろうし。

でもなかなか雪は降らない。まわりの畑を見まわすと残っているのはジブンチのはかりや、ノメシコキゲ(なまけもの・そう)でコッパズカシイ(大変恥ずかしい)からダイコトリをするのではない。注意怠りなく天気予報をみて雪直前の晴れた日をねらって、という待機のじりじりに負けたのだ。とつてしまえば終わるのだ。気持ちの重しがひとつとれる、きまりがつくのだ。

「キョウコサ(今日こそは)とるぞ」少し小さくても、まだ気温が高いから保存中に大根にスが入るかもしれないがしやうがない。気持ちの整理が、待つより大事になったのだ。

老人になるとこの気持ちだんだん前倒しになっていくらしく、十一月の十日ころからとっているのを見かけた。私の知るかぎり、ここ二〇年はどて一番早い初雪は十一月八日だ。だから、別にとつても悪くないのだ。他

人がどうこう口を出すべきことじゃない。けれどあいさつ代わりに「手まわしがいいない(ね)」と感想ぐらいい言います。かげでは「としよりになると、やたら気がかりせくがそ(せくのだ)」とか言ってますが。

そして一軒がとると、ばたばたと続くのもおもしろい。みんなとうかとうかまいか迷っているのだ。けど、カワキリはいやなのだ。見ている。そして誰かがとるとそれをきつかけにドドッと続く。

私は秋の大根は何種類か作っている。中で保存用はタキイ種苗の「耐病総太り大根」。これは今日本で作られている大根の七割だかを占めているという品種だ。こんなに一つの品種だけが作られる状況は好きじゃない。コシヒカリもそうだ。「方領」とか「聖護院」の在来種大根を愛している私だが、でもスが入りにくいという点で在来種はソーブトリには負ける。で、保存用にこれを作らないわけにはいかない。

とここまで書いて畑に出かけた。いい天気だ。山の紅葉もあらかた散り、高い山は雪を

かぶっている。寒々したすっきりした景色である。しかし雪国の住人にはこの晩秋の光景を鑑賞している暇はない。冬がそこまで来ている。冬の食料確保だ。といっても今は店に行けば冬でも何でも手に入る。だけど気分としてはあわただしい。とくに野菜をいろいろ作っているものにとっては。

大根を抜きにかかる。ここらじやコグという。ダイコトリなどしたことない、買うばかりだという人が多い世の中だ。ちよつとそこを詳しく書く。面白いかどうかわからないが。

コグといってもカタツパジからコグのではない。私の畑は無農薬なので虫の襲撃を受けたり病気が出たり、それで蒔き直したりで成長がテンデバラバラだ。その遅れて小さいのはまだコガない。これはホントのぎりぎりまで収穫を見合わせることにした。一度に大雪が降り、初雪イコール根雪となったらあきらめる。でももし、とれば雪や霜にあった一段と甘い大根が食えるし、小さくてもミノボシ(切り干し大根より大きく、大根を半分か四つくらいに割って干したものだ。煮たり、切

って出し汁で割った醬油に浸けハリハリヅケにする）にはできる。

こういうふうに残りを区切られ決断を迫られることは雪の降らない地方では少ないだろう。それは雪国の人の性格になんらかの影響を及ぼしていないか、どうか。

そんなコタどうでもよかった。コギ方だ。

畑が砂地なら大根に土はほとんどついてこないからそのままでもいい。が、普通はコイが大根には土がついてくる。それをどうやって落とすか。洗えばいい。そりやそうだ。ただとすぐは洗えない。どうするか。コイだからすぐ下っ葉をぐるっととり、それをいわばタワシにしてざっとベト（土）を落とすのだ。その葉はそこらにナゲテ（はおって）おけばいい。春までに腐っている。

野菜作りを始めた最初の頃はこういううちよつとした細部を知らなかった。ただ抜けばいいと思っていた。だから若さにまかせスッポンスッポン抜いていた。抜けば終わらだらうと。でもそれから何本かずつをまとめ、藁でしばって家に持ってくるのだった。葉っぱも

漬けて食うのだが、かたい下葉は捨てるのだ。だから畑でそれをとって有効利用し捨てるのはとても合理的なことだった。

藁でしばるというが、結ぶのではない。何と云うのかアノやり方だ。アレ。この年になっても名を知らない。知らなくてもできるからいいが。三・四本の大根をまとめ、適量（七・八本か）のスグツタ藁をとる。スグツタは共通語では「梳いた」だろうか。稲藁のハカマをとることだ。ハカマは藁についている柔らかい部分で、結束の邪魔になるのだ。縄ないの時もとる。ここらじやシビという。

片手の手指を広げクマデのような形にし、もう片方の手で穂先のほうを持ち、株元のほうへと梳く。昔はそれ専用の道具があった。するとシビがとれる。とったシビは昔は長靴のなかに保温材として敷いたり、綿の代わりに敷き布団に入れたりもした。ワラブトン、今でいえばマットレスに使った。私は敷いて寝たことはない。でも農家では、使っている家もあった。人の家のネマ（寝間、寝室）の万年床にまで入って遊んでいたのだ。何をし

ていたかは忘れた。藁のにおいがなつかしい。もとへ。スグッタ藁でしばらくころだった。

その一つかみを葉の根元から三分の一くらいのところをぐるっとまわし、交叉させて締め、先元一緒にゆるめないようにねじる。そのねじったのを折りまげ交叉したところに押しこむ。してみれば簡単なことなのだが書くとも面倒。藁のかたいような柔らかいような性質と葉の弾力のおかげで、けっこうしつかりしはる事ができる。縄やビニールひもじゃこうはいかない。こう書いてきたのにそのしじり方の名前を知らないのだ。(やっと戻った)

それを家に運び、葉を離します。当座食いとミノボシ用は洗います。この時、泥の下から現れる白さが輝くばかりに美しく、ほとんどエロチックだということは以前書いた。大根足は決して蔑称ではない美称だ、とも。

保存するのは洗わない。泥付きのままだ。

それを今私は肥料の空袋に入れ、口を閉じて冷たくしかり凍らない暗い場所にしよう。昔は土に埋めたり、ダイコダテという藁製の小さな小屋みたいなを作ってそこにに入れてお

いた。そこは雪と藁で天然の湿度一〇〇%の冷蔵庫だった。

……ダイコトリの話ではなかった。このダイコトリの間、大根の匂いがぶんぶんとしていたのです。コグために葉をもつところ、下葉をとるところ、しばらくところ、それ運ぶところ、葉を離すところ、洗うところ、それぞれ。その匂いは風景や動作とともに、またこの季節がめぐってきたことを体に教えるようでした。なつかしさも少しはある。でも元氣なら来年またかける匂いだ。それは「ダイコトリをした」と書けば抽象的なことに、現実感を吹きこむような匂いだ。

今でもその匂いを呼び起こすことはできる。が、現実の匂いのなかの私を呼び起こすことはできない。大根の匂い。



想 随 篇 掌

明けましておめでとうござい
ます。

新年というのは、それだけで
なんとなくおめでたい気持ちに
なってくる。昨日までの殺気だ
った正月支度も遠い過去のように
忘れ去り、みんなにこやかな
顔をして挨拶をかわす。

街の風景も師走から一変に正
月になる。人々の装いも普段着
から晴れ着に変わり、悩み事な
どなんにもない、というような
顔をして初詣にいたり、挨拶
まわりをする。

それにより、なんだか空
気さえも新しくなったような気
がするから不思議だ。

「おれにとつて、正月なんか
昨日が今日に変わるだけで、め
でたくもなんともない」

学生時代にそう言つて、勤め
てからも毎年スキーに出かけて
いた友人が、結婚し、子供が生
まれると、毎年、家族そろつて
新年の挨拶に来るようになった。
「あけましておめでとうござ
います。本年もよろしくお願
いいたします」

① なんか 変だな

これでいいんじゃないの

学生時代の言葉など忘れたよ
うに、いけしゃあしゃあと挨拶
をして、酒を飲んでいく。

ある年、「お前は、正月なん
か、めでたくもない、と言つて
いたのに、家族ができたら毎年
来るなんて、どういう心境の変
化だ」と聞いたら、「俺自身の
気持ちは変わらないよ。みんな
しているからおれもする。これ
でいいんじゃないの、めでたい
ことなんだから」だと。

(順)

吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160 東京都新宿区南元町17
TEL 03-3355-2168
振替 東京21176372

御法語に聴く

選択せんちやくとは即ち是れ取捨の義なり。(中略)弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて普あまねく一切を撰せんせんがために造像起塔等の諸行を以て往生の本願と為なしたまわず、ただ称名念仏の一行を以て往生の本願となしたまえるなり。

(『選択集』第三章)

「選択」とは、「選せんび取り・選せんび捨て」の意である。(中略)阿弥陀さまは、法蔵菩薩であられた昔、平等の大慈悲を發はつされて、すべての衆生を救わんがために仏像や仏塔を造るなどの行ではなく、称名念仏ただ一行を往生のための本願の行となされたのです。

選 択 〳『選択集』ご撰述八〇〇年の

佳辰を迎えて〳

新年あけましておめでとうございます。今年、平成十年、一九九八年は、浄土宗の宗祖、お念仏の元祖であられる法然上人が、建久九年、一九八八年に『選択集』をご撰述なされ、浄土宗のみ教えを体系化されてから、ちょうど八〇〇年目の佳（よ）き年にあたります。

『選択集』は、正式には『選択本願念仏集』といえます。法然上人が六六歳の年、建久九年春三月、前関白九条兼実公の懇請によってご撰述なされました。阿弥陀さまの選び取られた称名念仏が、往生のための根本の行であり、私たち凡夫に修し得る唯一の行であることを証明・体系化された浄土宗の根本聖典です。全十六章からなり、各章は「浄土三部経」や法然上人が阿弥陀さまの化身（けしん）として宗（あが）めた善導大師の『観経疏』を中心に、お念仏に関する肝要な文をお示しになり、それに法然上人自身のご見解を加えられる構成からなっています。

「ご存じのように私も浄土宗は、「お念仏を称えて阿弥陀さまのお浄土に往生する」との教えです。以前、他宗の僧侶である友人がこんなことを言いました。「浄土宗はいいねえ、お檀家の皆さんに阿弥陀さまの

お浄土を正面からお伝えてきるから」と。また別の、やはり他宗の友人にこんなことも言われました。「私が死んだら、阿弥陀さまのお浄土に往（い）かせてもらうんだ」と。

いかがですか？法然上人の教えの素晴らしさは、まさにこうした、なにげない言葉に集約されるようです。

『般若心経』の「空」に代表されるように、法然上人以前の仏教の教えは、「形（かたち）」を否定したクウなるものを最上・究極のものとして説いてきました。そして、昨今の科学的合理主義一辺倒の風潮は、私たちの「頭」に何とかそれをなじませようと、囁（ささや）きかけているかのようです。

けれども私たちの「心」は、そう簡単に割り切れるものではありません。なぜなら、生まれながらに私たちは、両親をはじめとする大切な方との「心と心のふれあい」という「形」を通した関わりの中で生きてきたからです。そして、たとえこの私の「へいのち」が尽きた後も、その「ふれあい」の中にあり続けたいと思っているからです。

大慈悲をもった阿弥陀さまは、そんな私たちの「心」のありさまをお見通しで、そうした「心と心のふれあい」をいつまでも持ち続けることのできる最上・究極の場（極楽）としてお浄土をご用意して下さったのです。そして、冒頭の『選択集』のお示しにあるように、阿弥陀さまは大いなる慈悲の心によって、そこに往生するためのたった一つの行として、声に出して称えるお念仏をご自身で選び（選択本願）、私たちに与えて下さったのです。その阿弥陀さまの大いなる慈悲の心を伝えようと、法然上人は『選択集』をご撰述なされたのです。

法然上人による『選択集』の教えの立て方は、当時の仏教界にとって空前絶後の出来事でした。なぜなら、これまでの仏教界は、煩惱を断じ得ない凡夫である愚かな人間の側が、仏さまの教えを選び取って随意に優劣を定めていたからです。けれども法然上人は、多くの方から「智恵第一」とまで讃えられながらも、煩惱を断絶し難い自分自身のありのままの姿をしつかりとお見つめになられ、私たちの修すべき行の選び取りの主体を、阿弥陀さまをはじめとするお釈迦さま、多くの諸仏という仏

さまの側へと転換・昇華なされたのです。ですから法然上人は、「選択」という言葉を仏さまの側からの選び取りにしか用いられません。さらに、『選択集』において法然上人は、誰にでも易（たやす）くできるお念仏こそが、いかなる仏道修行よりも勝（すぐ）れた行であることを懇切に証明なされたのです。ここにこれまでの仏教界の常識が覆（くつがえ）され、悟り（智恵）の仏教を超えた救い（慈悲）の仏教が成立し、誰もが平等に救われるお念仏の教えが開花したのです。

あれから八〇〇年、さまたまな宗教・宗派が乱立する昨今です。けれども、先に紹介した他宗の和尚（おしょう）さんの言葉にも表されているように、私たちの心の奥底には、まさに『選択集』ご撰述の願いに通じるものが共通して流れています。

掌（て）を合わせお念仏を称えれば、いつか必ずこの自分もお浄土へ往生させていただけるのです。そんな心からの安らぎを抱きつつ、仏さまへの感謝の中、日々の生活を幸せに過ごしてまいりましょう。合掌。

衝撃的でした。頭を突然ガツンと殴られたように……。

当会主催の講演会で講師をお願いした作家・辺見庸先生の「もの喰う人びと」を、遅まきながら拝読した小生の最初の感想です（講演録は本誌九、十月号に掲載）。太ベストセラーとなつたこの本は、ジャーナリストであつた辺見さんがアジア、ヨーロッパ、アフリカ、ロシアなどの国々を巡つて目にした、人間の「食う」ことに関わるあらゆる現実相を伝えたものです。

例えば「残飯を食らう」と題された一節は、バングラデシュはダッカのスラム街でのこと。屋台に並ぶ焼き飯や骨付き鶏肉は、実は残飯。富者の結婚披露宴などで出た残飯が、れつきと

若和尚の

チヨットいいはなし 其三十二

した「商品」として売買されている……。ゴミ捨て場には、野犬とカラスと一緒にあさっている子供達の姿……。

対し、例えば「胃袋の連帯」と題された一節は、タイはバンコク郊外の世界一大きいレストランではなし。世界各地の豪華な料理を、むさぼるように食いつく客人達。ただしそれは決して飢えているからではなく……。

さて……。今を生きる我々はこうした現実の諸相をどうとらえればいいのでしょうか。「対岸の……」的見方は、もはや危険でさえあるはず。昨今、生きることに對する真摯な姿勢の欠如が指摘されるのは、「食」に向き合う姿勢と関係なしとは言えないと思うのです。本来、食と生

とはダイレクトに、混ざりけなしに結ばれているはずですが、今の日本での豊かな生活の上にはその図式は成立しえていないのかもしれない。

バングラデシュの話はほんの一面です。「もの喰う人びと」は、世界には戦禍や天変などで飢えにあえぐ多くの地域があることをリアルな描写をもつてつきつけてくれ、そしてまた、私達がいつの間にかめるま湯にとつぷりとつかり馴れていたことを気づかせてくれます。

テーブルに並んだ料理に何気なく運んでいた箸。あの軽い箸を皿と口とを往復させることが、実はいかに重く貴いことであつたかを、まざまざと教えてくれた一冊でした。

(正)

大室了皓師が答える 読者からの仏教相談

お坊さんの呼び方
お寺の名前



いつも楽しく読ませて頂いております。

先日親戚の家のご法事で、お寺に伺ったときに困ってしまったことがあります。

それは、お坊さんをお呼びするときに、ご住職とか、方丈さんとか、お尚さまとか、さまざまに呼び方があるように思われ、いったいどれが正しく失礼がないのか、迷ってしまっただけです。

お年配のご老僧と、お若いお坊さんとは呼び方が違うでしょうし、また、いつも私は自分のお寺ではご住職とお呼びしているのですが、親戚の法事ということもあり、初めての

お寺でどの方がご住職かもわからなかったの
で、どの方にもご住職と呼んでいいものかわ
からず困ってしまいました。

是非それぞれの意味とどうお呼びすること
がいいのかお教え下さい。

また、お寺の名前に、○○山とか、○○院
とかついていますが、あれはいったい何なの
でしょうか。三つのお寺が合わさったとい
うことなのでしょうか。

素朴な疑問で、どこにお伺いしたらいいの
かわからず、お手紙させて頂きました。どう
かお教え下さいますようお願い致します。

(東京・主婦)



一、お坊さんの呼称

一般的には、お尚様（オシヨウサマ）とお呼びすれば良いかと思っています。

ご住職というと、その寺の代表者で一人しか居られませんから、年をとっておられるお坊様だからといって、ご住職とお呼びしたらお困りになると思います。

貴方はご住職ですかと、伺うのも失礼になるでしょうから、はっきりとお分かりにならない方には、「お尚様」が一番差し障りが無いと思います。

● 方丈様

お釈迦様がおいでになった頃の昔、熱心な仏教信者で維摩居士（ユイマコジ）という方がいました。

お弟子達が論争しても、しばしば負けてしまう程の深い知識を持ち、人格的にも多くの人から尊敬されていた有名な方でした。

この方の居室は一丈四方でした。今でいう四畳半の広さの部屋で、方丈と言っていましたので、この故事にならって、お寺のご住職

や、ご長老の居室を方丈と言い、それからご住職などのことを方丈様とお呼びするようにしました。

今でもその方が住んでおられる所を呼び名にしていますね。

東京の叔父さんとか、京都のお兄さんとかお名前を呼ぶ代わりに、住所を頭につけてお呼びしている例は沢山あります。これと似たようなものだと思います。

お寺だけではなく、お師匠様をも方丈様とお呼びすることもあります。

ご住職やお寺の長老様を、方丈様とお呼びしても失礼ではありません。丁寧な呼び名だと思います。

ただお若いお坊様に対しては、呼ばれた方が恥ずかしがられるでしょうが、ある年齢になられている方には一向に差し障りありません。

● 和尚様

インドの古い言葉で師と崇める方をコーシヤと言っていました。その言葉が中国語で音

訳されて、和尚という字を当てました。

昔は師匠のお坊様や、高僧、更に武術や芸道などの師範などの方をお呼びしていましたが、今では一般にお坊様に対して使いますが、一応の修行を終えた方に対する呼称とされています。

意味は「和上（ワジョウ）」と同じです。

なお天台宗では、カシヨウ。禅宗や浄土宗では、オシヨウ。真言宗に法相宗、更に律宗では、ワジョウ。なお律宗で「和上」と書きます。

二、お寺の名前

● 山号

もと寺院の殆どは、山の上にあります。山の名前は昔から人々に良く知られていましたが、お寺は昔からの山の上に創立したものですから、その山の名前を寺の名前の前に付けて、お寺が何処にあるのか人々に良くわかるようにしました、それを山号といいます。比叡山延暦寺、高野山金剛峰寺などは良くご存じでしょう。

その習慣が今に残って、町の中にあっても〇〇山という山号を付けることになっています。

● 院号

「院」とは貴人の別荘など、垣をめぐらした大きな構えの家に付けたものです。

また公共的な建物を表し、その名の下に添える言葉でもあり、宮殿とか官舎を表す言葉でもありました。

中国の唐代の末には、寺の名前に用い後世になると、寺の中の別の建物に「〇〇院」という名を付けました。

更に時代を経ると、寺の総称としてまた敬称として用いるようになりました。

ですから一つの寺には必ず山号と院号が付けられています。

因に京都の浄土宗総本山知恩院は、正式には華頂山大谷寺知恩院、東京の大本山増上寺は、三縁山広度院増上寺といえます。

利根川裕のホットアングル

徳川慶喜の
墓の人たち

利根川
裕

NHKの日曜日の大河ドラマが「徳川慶喜」よしのぶ

だということ、雑誌にも慶喜に因んだ特集記事が多い。私も二つ原稿を依頼された。

そんなことで、十一月の下旬の冷たい雨の降る日、東京・上野の寛永寺にすぐ隣接する谷中墓地に、はじめて徳川慶喜の墓を訪ねた。徳川宗家の廟は、増上寺と寛永寺にある。が、慶喜の墓は、代々の徳川家祖廟のところにはない。

慶喜は十五代将軍ではあったが、将軍として死んだのではなかった。また、徳川宗家の相続者として死んだものでもなかった。

ついでに言えば、慶喜は将軍としては、一日も江戸城にいたことはなかった。彼が十五代将軍となったときは、京都から離れられなくて二条城に入った。そして、鳥羽・伏見の戦いに敗れて海路大阪から帰京して江戸城に入ったが、すでにこのとき彼は大政奉還して将軍職ではなくなっていた。

それはともあれ、慶喜が亡くなったのは大

正二年（一九一三）十一月二十二日、七十七歳であった。三十二歳で江戸城を去ってから四十五年もの隠退生活を送っていたわけである。

葬儀に当たっては一悶着があった。慶喜は生前に谷中に墓域を用意していた。そして葬儀は自分の生家である水戸徳川家の風にならって神式と決めていた。

ところで、葬儀をするとなったら、かつて彼が寛永寺の大慈院に蟄居謹慎していたこともあり、谷中墓地に近いこともあって、寛永寺境内でとり行なおうとしたが、寛永寺側としては、ここで神式の葬儀をさせるわけにいかない。寛永寺は中堂を式場に貸すのを断わった。結局のところ、寛永寺の裏手の空き地に仮斎場を設けて行なわれた。葬儀委員長は渋沢栄一。神道なので、慶喜には戒名はない。さて、谷中にある徳川慶喜墓地である。標識があったからすぐに見当はついたものの、鉄扉が閉じられていて、墓域内には入られない

い。葵の紋のついた鉄格子越しに中をうかがうと、従一位勲一等徳川慶喜之墓と記した標柱が立っていて、向かってその左に円筒型の墓がある。そしてそれと並んだ右側に美賀子夫人の墓。

わたしなどには、見たこともない形の墓である。もともと神式の土饅頭型で、脇を石でかため上は芝生という簡素なものであったが、その後になって、上の芝生に雑草が生えるためか、上部も石をコンクリートでかためたものにしたのだ、とか。そのせいか、一見、かなり異様な墓型である。

ところで、慶喜の墓の背のほうに、同型であるが小ぶりの墓が二つ並んでいる。中根幸と新村信の墓である。お幸さん、お信さんと呼ばれていた側室である。さらにその奥に、ほぼ同型だがもっと小ぶりの墓がある。女中頭として生涯を慶喜のかたわらで送った一色須賀のものである。

つまり、正室、側室二人、女中頭と、慶喜

と深い関わりをもった四人の女性が、同じ墓域内にいるのである。

さらに、鉄格子に頬をすり寄せてのぞき込むと、美賀子夫人の墓の右側奥に、同型ではあるものの、かわいいくらい小さな墓が四基見える。雨にうたれての遠目には確かめられなかったが、これが美賀子夫人との間に生まれた子らしい。もともと夫人の子はいずれも育たなかった。慶喜の子として育った十数人はすべて、幸と信の二人の側室の産んだものである。

慶喜の子は、正室、側室ともども、すべて明治以降の誕生である。ということは、將軍時代の子はいなくて、みな静岡での隠居時代に産んだ子だ、ということになる。

正室とともに、二人の側室ともに生活していた。そして二人の側室はそれぞれ十二人の子（流産を含む）を産んでいる。二人はかわるがわる毎年のように子を産みつけていたのである。

美賀子夫人との仲は、どうもしつくりとしたものではなかったらしい。美賀子は一条忠香の娘である。ただし、これは養女。じつは当初、慶喜は一条忠香の娘照姫（千代ともいう）と婚約していた。が、照姫が病氣になったため婚約破棄。病氣というのは痘瘡である。つまり、はしかにかかってあばた面（とうそう）になってしまったのである。それで急掟、その身代りに美賀子が一条忠香の養女となり、照姫が用意した嫁入り仕度や嫁入り道具一切とともに慶喜のもとに来たのである。

なお、この一条忠香の娘寿栄姫が明治天皇の皇后（のちの昭憲皇太后）であるから、戸籍上からいえば、慶喜夫人美賀子と昭憲皇太后は姉妹ということになる。

ところで、女中頭の一色須賀である。彼女は「一位さま（慶喜のこと）は、わたしがお蚕（かいこ）ぐるみにしてさしあげる」と、まめまめしく慶喜の身辺を世話した女性で、慶喜もすべての重用してすべてを委（まか）せていたらしいが、

この女性との間には、子はいない。須賀は、お清（きよ）（手つかず）だった、ともいわれる。もともと、司馬遼太郎の小説『最後の将軍』では、慶喜が須賀の体の大切なところを画仙紙にスケッチし、絵の具で彩色する場面が描かれている。

谷中墓地の慶喜の墓域内には、もう一对の墓がある。正三位勲二等公爵徳川慶久と同夫人実枝子である。やはり土饅頭様の同型のものである。慶久は幼名が久（ひさし）。母は側室のお信である。のちに慶久と改めて慶喜家の相続者となったのである。

なお、この徳川慶喜の墓域のすぐ近くに徳川誠の墓がある。お幸の子で、慶喜家の分家である。

また勝精（くわむ）の墓もある。精はお信の子で勝海舟の養子となって勝伯爵家を継いだのである。

（作家）

平 成 十 年 謹 賀 新 年

總本山知恩院門跡第八十六世
淨土門主

中村康隆

大本山 増上寺
法主

藤堂恭俊

大本山清淨華院
法主

江藤澄賢

大本山 光明寺
法主

戸松啓真

大本山 善光寺大本願
法主

鷹司誓玉

法然上人御降誕地廿五霊場第一番
中国三十三観音特別霊場
中国三十三地藏尊霊場第一番

誕生寺

〒700 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
電話（〇八六七二）八一二一〇二

浄土宗宗務総長

成田有恒

〒154 世田谷区世田谷四一七―九

大吉寺

浄土宗教学局長

袖山榮真

〒380 長野市西後町一五六八

十念寺

年 賀 謹 十 年 成 平

浄土宗大願寺住職
浄土宗議會議員

神谷英敏

〒042 北海道函館市銭亀町101

清水湊
實相寺

浄土宗九品院住職
浄土宗議會議員

小田義海

〒857 11
佐世保市大和町一八八二一

大松寺

住職
酒井亮貫

〒108 東京都港区三田四一―一二三八
電話(〇三)三四五一―二四九四

大正大学
日・朝佛教友好協会

理事長
大田秀三

京都文教短期大学

学長
伊藤唯真

〒611 京都府宇治市横島町八〇番地
(〇七七四)二一―四一〇一

天光院住職
芝学園理事長

真野龍海

淑徳大学・淑徳短期大学
理事長

長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五一五―一二

平 成 十 年 謹 賀 新 年

愚鈍院
住職

中村眞道

桜観音・こつぶがや文庫
〒984 仙台市若林区新寺三十七・七
電話(〇二二)二一五六六〇五七

函館
称名寺

〒040 函館市船見町十八・十四
電話〇一三八(二三)〇五七四

明顕山 祐天寺

住職 本多正雄

副住職 巖谷勝正

〒153 東京都目黒区中目黒五・二四・一五三
電話(〇三三)三七二一〇八九

西念寺住職

武田 喬彦

和歌山県海南市阪井四六六

神奈川教区教区長

清水 嚴矩

〒248 鎌倉市材木座六・十七・十九

晴雲寺住職

塚田 弘導

〒254 平塚市立野町六一五
電話〇四六二(三二)二六三三八

東京教区教化団長

常光寺住職

大谷 壽雄

〒144 品川区上大崎一・一三・三
電話〇三三(三四四一)四九三二

東京教区教区長

光取寺住職

大室 了皓

〒144 品川区上大崎一・一五・十
電話〇三三(三四四一)八三八四

平 成 十 年 謹 賀 新 年

〒142 東京都文京区小石川三丁目十四番六号

無量山 傳通院

電話(〇三)三八一四二七〇一(代表)
振替東京六〇九三番

鎌倉大仏殿 高德院

住職 佐藤密雄

〒248 鎌倉市長谷四二二八
電話(〇四六七)二二一〇七〇三
FAX(〇四六七)二二一五〇五一

光円寺住職

佐藤良純

112 文京区小石川四十二一八

願行寺住職

佐藤成順

〒140 品川区南品川二一五

横浜 大光院

宮林昭彦

勝願寺

〒350 埼玉県鴻巣市本町八一三十三

お寺は生きているうちに行くところ
ナムアミダブツのお寺

住職 樋口隆信

副住職 樋口伸生

〒986 宮城県石巻市門脇町二一五七七四光寺
電話(〇二二五)二二一一二六四

浄土宗梅窓院住職

中島真成

〒107 東京都港区南青山二二六一三
電話〇三(三四〇四)八四四七

誌上俳壇

古寺の脇道たどる紅葉かな

落葉数く古刹の庭に師を偲ぶ

いなりずしお齋今日しも十夜かな

妻ゐぬと思へば庭の菊をほめ

落葉掃く都電ひっきりなしにかな

破れ障子幼なの写真増へすぎて

一花とはあまりに小さきお茶の花

蟹の役もらひたる子や冬苺

紙縫こよりよる手を見つめられ年用意

山田瑞邦（神戸市）

松本厚子（町田市）

吉田ゆきゑ（江戸川区）

自画像の語りかけるや除夜の鐘

数々の良き出会いあり福寿草

老妻と一蓮托生蓮の露

矢島 寛（台東区）

花鋏鳴らして戻る小春かな

ハイテクの研究所裏大根引く

内堀綾子（小平市）

落慶を修せし一日菊日和

宗紋と寺紋際だつ秋落暉

佐藤雅子（上山市）

イシーヤーキイモはるかなるものを呼びゐたり

焼芋を包む新聞脳死記事

児玉仁良（入間市）

「J」ばずる

●J・ばずる

今号からクロスワード・パズルが仲間入り！
活字に疲れたら、ちよつとひと休み。頭の体操を、あなた
もどうぞ！

タテ・ヨコのカギをたよりにマス埋めて、二重ワクの部分をつなぎ合わせると……。答えがわかったら、「J・ばずる係」までふるって応募下さい。抽選で五名の方に記念品を差し上げます。（締め切り・一月二十日必着で）

★ヒント暮・新春に出回るもの★



〈ヨコのカギ〉

- ①愛する人と別れる苦しみ。
- ②風邪かしら？
- ⑧入居者を待つ家。
- ⑫睡眠不足、疲れすぎ。
- ⑬スペースシャトルの地球
周回軌道に乗る部分を。
- ⑭芥川龍之介の名作。
- ⑮日本のお金の単位。
- ⑯自分の属する党派。
- ⑰あでやかで美しいこと。
- ⑱こんな名前でもキノコで
す。
- ⑲人間の感情。——染。
- ⑳中国最初の統一王朝。

〈タテのカギ〉

- ①しゃぶしゃぶをすると必ず出てくるもの。
- ②バイオリンより大きい弦
楽器。
- ③「想像」を英語で。
- ④病気がおこること。
- ⑤太陽と——。
- ⑥腰を曲げずに機械でラク
ラク。日本の主食を作る。
- ⑦地球表面の約1/4。
- ⑧お酒のつまみになるおい
しい木の実。
- ⑨岡山県南部に位置し水島
臨海工業地域がある。
- ⑩現世利益を略して…。
- ⑪なつかしのアイドル二人
組。ミイちゃんと——ち
ゃん。

●J・FORUM（浄土の広場）

毎号、ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー「J・FORUM（浄土の広場）」。俳句や短歌などのほか、書評や随筆、詩、身近な出来事や情報などを、左記の要領でとんどん応募下さい。

1 随筆・歌など：四百字詰め原稿用紙十枚以内。
2 俳句・短歌・川柳など：四首まで。

3 その他、本誌の掲載記事に関するご意見やご感想など：適宜。

いずれもタイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。

また、原稿は返却致しませんので、必要な方は事前にコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈致します。

●新しい会員をご紹介下さい！

当会では、随時新会員を募集しております。お友だちやお知り合いの方々に、是非法然上人

讃仰会への入会、そして「浄土」講読をお勧め下さい。ご連絡いただければ、見本誌、パンフレットをお送りします。

また、ご紹介頂いた方と新しく入会された方には、記念品を進呈致します。

●会費ご納入のお願い

すでにお手元に、平成九年度会費納入の振り込み用紙をお送りしておりますが、まだ未納の方は早めにお振り込み下さいますようお願い致します。

●新規会員ご紹介

講読会員

東京	世田谷	岡崎百合子
広島	西部組	称名寺
大阪	茨城	岸田球心
石川	加賀	前田皎祐
神奈川	大磯	河合富美子

ご入会有り難うございました。



初東雲光り輝く選八年

岱潤

今年一九九八年は、法然上人が主著といわれる『選択集』（『選択本願念仏集』）を選述された年（一九八八年）より数え、八〇〇年目となる記念すべき年である。

御存じのとおり浄土宗では、一昨年より記念行事が数々組まれ、『選択集』になじみ薄かった方々にも、『選択』という文字が、目にお入りになっていることと思う。

いよいよ今年はその正当の年、宗の発行する印刷物では、こぞって『選択集』を取り上げることになるだろうし、本誌も特集号を組むことになると思われる。法然上人が一番言いたかったこと、私が選択されたその選択の基準は何だったのかなど、今一度かみしめることは、十分意味あることと思われ。できるだけ分かりやすさをモットーに、編集に心がけるので、どうぞご期待あれ。

今年の表紙は、鉄道マニアとして知られ、鉄道のある風景を撮り続けていらつしやる川井聡氏にお願いした。氏の写真は鉄道を撮りながら、つねに目はそこに生きる人間に注がれており、温かさを感じさせる。「生きる」を潜在テーマとしている本誌に適っていることと思う。

早いもので私がチーフを引き継いでから、もう四年目になる。三年間どうにか続けられたことに、温かく見守ってくれた読者諸氏、ご執筆いただいた先生方に感謝の念で一杯だ。

スタッフ一同、注目を集められるような本に致したく、今年も尽力致す覚悟なので、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

（長）

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

石上俊教

佐山哲郎

編集顧問

大室了暗

浄土

六十四巻一月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成九年十二月二十五日
発行——平成十年一月一日

発行人

編集人

印刷所

〒一〇五 東京都港区芝公園四一七 四明照会館内

発行所

電話

FAX

振替

真野龍海
宮林昭彦

法然上人鑽仰会

〇三三三五六八六九四七

〇三三三五六八七〇三六

〇一八〇一八八二八七

この冬に集まれ、
この味が冬物語。



きらり、味わい深く。ウィンタイプビール

冬季限定

冬物語



新
登
場

●ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ



サッポロビール株式会社

ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は午後1時から午前5時まで停止されています。サッポロビールホームページアドレス<http://www.mediagalaxy.co.jp/sapporo/>

法然上人讃仰会・発行